

「龍蹄」小考

——漢語受容史研究の一問題として——

山本真吾

一、平家物語に於ける漢語研究の現況

平家物語は「所謂和漢混淆文の上乗なるもの」で、「そのよく漢語を用ゐて国文に調和せしめたる伎倆はわが文章史上に於ける偉観なり」と評されて⁽¹⁾いて、そこには、多種多様の漢語が使用されている。

この漢語について、従来、

佐藤喜代治「平家物語と記録体の文章」（『日本文章史の研究』昭41・明治書院）

佐藤武義「『平家物語』における漢語の研究」（『宮城教育大紀要』5、昭46・3）

佐藤喜代治「近代の語彙1」二「平家物語」の語彙（『講座国語史3 語彙史』昭46・大修館書店）

等の研究が知られており、異なり語数・延べ語数・使用回数⁽²⁾の分布が報告され、又、所謂「和製漢語」・「和化（準）漢語」の一端が明らかにされている。

しかしながら、平家物語に認められる一々の漢語が、前代の如何なる文献より摂取されたものなのかという問題については、必ずしも明らかにされているわけではなく、かような、平家物語に於ける漢語受容の問題は、ほとんど等閑視されて来たといっても過言ではなからう。

その研究の進展を妨げ続けて来たのは、第一には、言語の大海の中から一本の針の如き一漢語を探し求めるという膨大な作業を必要とすることがあげられよう。「前代の文献」と一口に言っても、我が国で成立した仮名文学作品、公卿日記・古文書といった古記録の類、法令に関する書、宗教に関する書、往来物、漢詩文のみならず、加えて中国大陸より将来せられた浩瀚な漢籍・仏典の類の、莫大な量の文献が存するのである。これをしらみつぶしに検索してゆくという途方もない作業がまず研究者を逡巡させるのである。

第二には、今は伝存しないが、平家物語成立当時には存在したと見られる文献も当然想定されるのであって、結局、その出自を求めたり、受容過程を明らかにすることなど出来はしないのではないかという研究者の危懼も存するのではないかと思う。

第一の障害については、近時、数多くの国語学の好資料が影印・翻刻され入手しやすくなったことや索引・引得の類が充実を見せて来ていることなどから、徐々に克服されつつあると見てよい。

第二の障害については、現段階では如何ともし難く、或いはそのへ危懼も多分に妥当な所が多いかも知れない。只、たとえ、漢語の出自を一文獻に特定できなくても、如何なる文献群から受容された可能性が強いかといった程度であれば明らかに出来る部分があるかも知れないし、そういった考察を通してこの課題の限界を見極めることも必要であろう。

ともあれ、従来の平家物語についての言語研究は、一つに、「和漢混淆文」の名が教える如く、前代の如何なる文體範疇の言語要素を受容しているか（具体的には、平安時代の和文語か漢文訓読語か記録語かといった類）という所に焦点が当てられて研究の進展を見ているのである。しかしながら、平家物語の文章構成要素として、重要な位置を占める「漢語」がその素姓をほとんど明にされないまま今日に到っていることは甚だ遺憾とも言うべきであり、作業の困難を承知の上で、又限界の存することを弁えた上で、一步でもこれを前進させることは必須の課題であると思わ

れるのである。

本稿では、平家物語に使用されている「龍蹄(りようてい)」という漢語に注目し、その受容の過程を辿りながら、右の問題の解明してゆく手懸りを模索したい。

二、平家物語に於ける「龍蹄」の使用例

覚一本平家物語(岩波日本古典文学大系)に「龍蹄」という漢語は、次の如く使用されている。

① 明る十二日、奥の秀衡がもとより木曾殿へ龍蹄二疋奉る。やがて是に鏡鞍をいて、白山の社へ神馬にたてられけり。(巻第七・俱梨迦羅落、下74-13)

この語は、覚一本だけでなく、延慶本にも認められ、

② 巳ノ尅ニ撰政院参先ツ金翠ノ桶ノ中ニ金銀ヲ以テ橘ヲ作リカウハシキクタモノヲ収ム寮一疋鞍ヲ置テ此ヲ進ス(第三本・15 白河院祈親持経ノ再誕生、56オ3)

の如く用いられる。

但し、延慶本の方では「寮牀」に作っており、その字面を異にしている。

①「龍蹄」と②「寮牀」とは、ともに、①「二疋」・②「一疋」と数えられ、①「鏡鞍」・②「鞍」を置くのであるから、ハ馬Vを指している語と解される。さらに、双方、①「奉る」・②「進ス」対象であり、①神馬に立てられたり、②金銀とともに献上するのであるから、ハ良い馬V即ちハ逸馬Vを意味すると考えられ、語義的には同じであると見られる。

②「寮牀」の「寮」の字音は、「療」・「遼」・「繚」等、これを音符としているものは、

(1) 漢音資料

遼一川（圖書寮本文鏡秘府論、天・36）

針シム療レウヲ（興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点、九ノ四六五）

(2) 吳音資料

療レウ（去）ツクロフ（法華経音訓、59 4 1）

繚レウ（平）マトウ（同右、91 4 4）

の如くであつて、悉く漢音・吳音ともに「レウ」である。延慶本の附訓「レウ」と一致する。

一方、「躡」の字音は、

(1) 漢音資料

飛ヒ（平）躡テイ（去）躡テイ（上）躡テイ（平）（長承本蒙求、93）

大體テイ（圖書寮本文鏡秘府論、東・43）

(2) 吳音資料

躡タイ（平）スカタカダチカナウル（法華経音訓、21 6 3）

略リョク（入）躡リヤク（前田本色葉字類抄、上・75ウ3）

であつて、延慶本の附訓「テイ」は、漢音形と見られる。

「躡」と「躡」とは、仮名書音形としては同じであるが、「龍」と「寮」とは、字音仮名遣からすれば、龍||「リヨウ」・寮||「レウ」であつて一致しない。しかしながら、「龍」字は、鎌倉時代には「レウ」と訓ぜられることもあつたらしく、小林芳規博士は、

○字音仮名遣で「リョウ」とされ、又平安時代の訓点資料でも「リョウ」「キョウ」等「リョウ」形で仮名表記された字音語を「リョウ」形で表記する例が、鎌倉初期前後から中期以降にかけて見られるようになる。

として、

○「竜」(鐘韻三等)

竜^{レウ}胎^{タイ} (本朝文粹正安元年ハ一二九九ノ点)

準^{レウ}敵^ホ (大理図書館蔵古文孝経正安四年点)

竜^{レウ}ノ鱗^{イロクツ} 177 袞^{コン} 竜^{レウ} 340 時^シ 竜^{レウ} 354 応^{エウ} 竜^{レウ} 188 雲^{ウン} 竜^{レウ} 377 (正安本文選)

「竜^{リョウ}」もあり)

の例を掲げていられる。

従って、音の上からも、「寮躋」と「龍蹄」の両者は通ずるものと見て矛盾しない。

古辞書等には、

○龍^(平) 蹄^(去)馬名也 (前田本色葉字類抄、上75ウ2)

龍^{リョウ}蹄^{テイ} 異名 (伊京集・畜類、43・6)

龍^{リョウ}蹄^{テイ} 見^マ 馬^バ 一^一 名 (書言字考節用集・禮、5160・1)

の如くすべて「龍蹄」に作っており、「寮躋」の例は見られないから、延慶本の「寮躋」は「龍蹄」の宛字と判ぜられる。但し、何故に「龍蹄」を「寮躋」に作ったかという点については、今のところ未詳とせざるを得ない。

三、漢語受容史研究のフローチャート

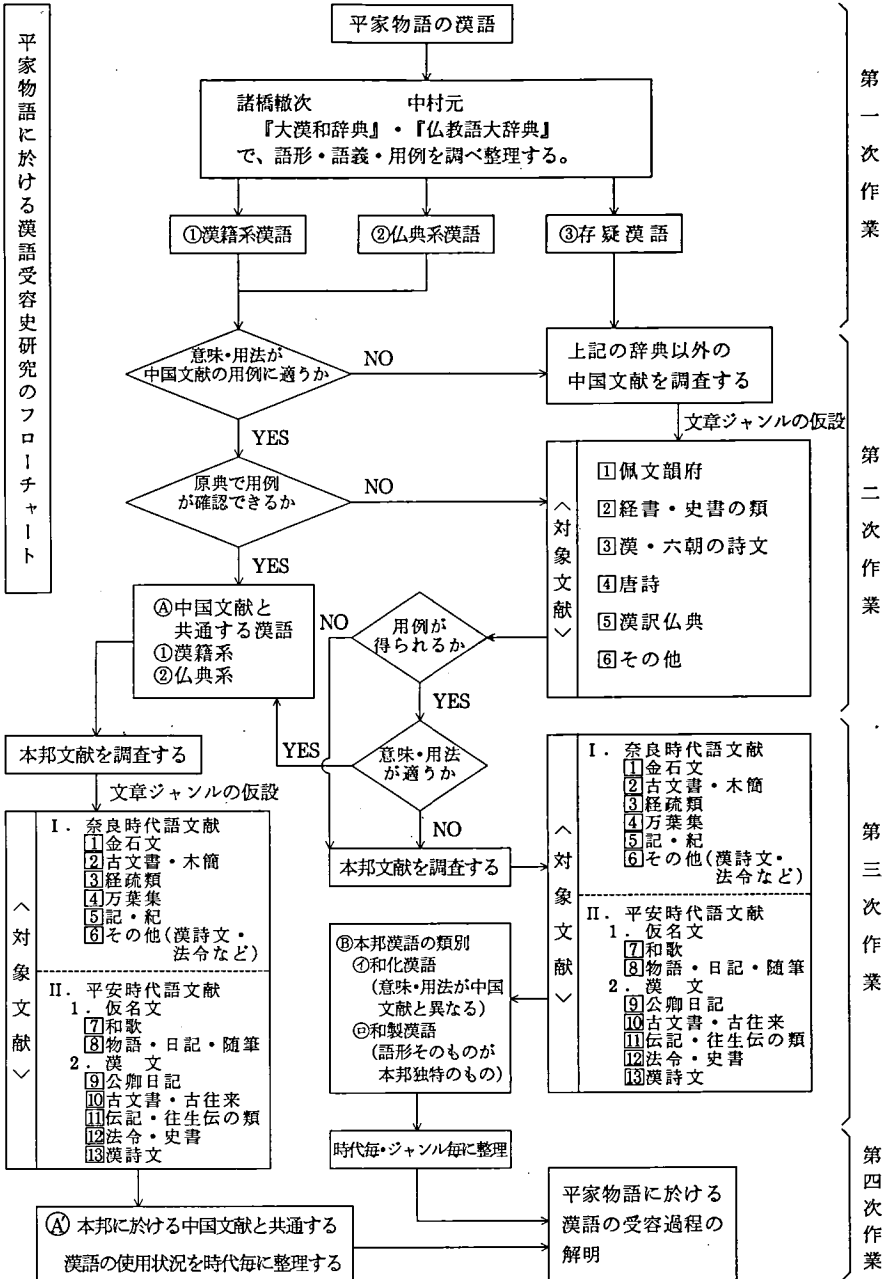
さて、平家物語に受容された一々の漢語の受容過程を明らかにするためには、多種多様の、時代を異にする大量の文献を検索するという膨大な作業量を必要とすることは、先に述べたところである。

そこで、今回ここにフローチャートの試案を提示してみたい。

大量の文献を、時代毎・ジャンル毎に整理して、作業手順の凡そを示しておくことは、それによって、個々の作業が全作業の流れの中で何処に位置付けられるかが容易に確認できることになる。従って、調査漏れを防ぎ、能率を高めることになり、今後のこの方面の研究には有意義であると考えられるのである。

以下、これに基いて、「龍蹄」について調査を進め、その成果を記述することとする。

尚、作成にあたっては、前田富祺博士作成の「語史研究のフローチャート」⁵⁾を参考にさせて頂いた。



四、中国文献に於ける「龍蹄」の意味

前項に於いて提示したフローチャートに従って、まず、現行の漢和辞典等の記述を調べることから出発して、中国文献（漢文乃至漢文訓読文）に於ける「龍蹄」の使用状況を記述することとする。

諸橋轍次著『大漢和辞典』修訂版（巻十二、大修館書店・84）に於いて「龍蹄」の項を求めると、二つの意味項目が挙っている。

(1) 龍の蹄。又、馬の蹄。

用例は、「曹植、病馬詩」である。この例は、恐らく佩文韻府に拠ったらしく、これと同じ箇所が引かれてある。しかし、原典本文に当たるとべく曹植の詩文を検索してみてもこの例が得られない。

そこで、唐代頃までの種々の文献（フローチャート①②③参照、詳細は後掲）を検索した結果、曹唐の「病馬五首呈鄭校書章三吳十五先輩」（全唐詩、巻六百四十）の次の詩中の語であることが判明した。

③空被秋風吹病毛。無因濯浪刷洪濤。臥來總怪龍蹄阻一作阻。瘦盡誰驚虎口高。追電有心猶款段。逢人相骨強嘶號。

欲將鬻一作鬻鬣重裁剪。乞借新成一作城利鉸刀。八十卷・七三四四V

第三句め「龍蹄」の述語は「阻」である。

「阻」は、

○阻、行不正也、一曰、馬蹄痛病、〔集韻〕

とあって、詩題からも知られるように八馬蹄の病Vの意と解せられる。「龍」はこの場合、

○馬八尺以上爲龍、〔周禮、夏官・瘦人〕

とある如く、馬を指すと考えられ、表現の上で四句めの「虎口」と対を成す。

従って、この「龍蹄」は、△馬の蹄▽の意で用いられている(但し、修辭上△龍▽の意を掛けてある)と判ぜられる。かかる例は、「龍蹄」と熟してはいないが、陸龜蒙の「舞馬」(全唐詩・卷六百二十九)にも認められ、

④月窟龍孫四百蹄。驕驪輕步應金鞞。△九卷・七二二五▽

の如く用いられている。

(2)瓜の一種

『大漢和』の例に、諸文献より採し得た例を加えて挙げると次のようである。

⑤龍蹄、虎掌、羊駝、兔頭、云云、瓜屬也。〔廣雅・釋草〕

⑥瓜以遼東盧江燉煌之種爲美、狸頭、蜜笄、羊髓、龍蹄、其名各異、龍蹄瓜、羊髓瓜、大如斛、出涼州。〔廣

志〕

⑦欲識東陵味。青門五色瓜。龍蹄遠珠履。女臂動金花。〔李嶠・瓜、全唐詩卷六十〕

今回の調査で得られた、中国文献の「龍蹄」の用例は、以上である。

△瓜の一種▽としての「龍蹄」は

○龍蹄 同(アラウリ) (前田本色葉字分類抄、ア・植物、下26オ3)

とあり、本邦に於いてもその意が知られていたことが確認される。

しかし、今回の調査では、平家物語に認められる△逸馬▽の意の使用例を見出すことは出来なかった。書言字考節用集に、

○^{レウチ}蹄^逸馬^ノ一^名 (前掲)

(龍蹄見文選)

とあるが、『文選』に「龍蹄」の使用例は認められない。

中村元『仏教語大辞典』（東京書籍・75）には「龍蹄」の例は認められず、『大正新修大藏経』の索引にも見出し得なかった。

以上の考察を通して、平家物語の「龍蹄」は、『漢籍系漢語』（フローチャート①）ではあるが、中国文献のそれは意味の異なる、所謂「和化（準）漢語」（フローチャート⑧①①）の一である可能性の-highいことが知られる。

《索引文献一覧》（フローチャート対象文献）

①佩文韻府（清聖祖敕撰、王雲五編）

②経書・史書の類

論語引得・孟子引得・春秋経伝引得 1-4・爾雅引得・周易引得・荀子引得・墨子引得（以上、哈佛燕京学社引得特刊）・禮記引得（哈佛燕京学社引得）・管子引得（中文研究資料中心研究資料叢書）・老子索引（豊島睦編）・莊子引得（弘道文化事業有限公司編）・国語索引（東方文化学院京都研究所編）・列子索引（山口義男編）・後漢書語彙集成上・中・下（藤田至善編）・史記索引（二十四史索引之一、黄福鑾編）・漢書索引（二十四史索引之二、黄福鑾編）

③漢・六朝の詩文

全漢詩索引（松浦崇編）・三国志及裴注綜合引得（哈佛燕京学社引得）・陶淵明詩文索引（堀江忠道編）・世説新語索引（高橋清編）・玉臺新詠索引（小尾郊一・高志真夫編）・文選索引 1-3（斯波六郎編）・全漢三国晋南北朝詩上・下（丁福保編）

④唐詩

全唐詩一〜十二（彭定求等奉勅撰、中華書局）

⑤漢訳仏典

法華經一字索引 付開結二經（東洋哲学研究所編）・一切経音義索引（沼本克明・池田證壽・原卓志編、古辞書音義集成19）・大正新修大蔵経索引

⑥その他

毛詩引得（哈佛燕京学社引得特刊）・文心雕龍索引（岡村繁編）

五、本邦文献に於ける「龍蹄」の意味と位相

前項では、唐土の文献に「龍蹄」の字面を求めることは出来たが、その意味は平家物語のそれとは異なっていることを指摘した。

この項では、本邦に於ける、平家物語成立以前の使用状況を精査することによって、平家物語に「龍蹄」が受容されるまでの道筋を明らかにしてみたい。

I、奈良時代語文献

奈良時代の言語を反映すると認められる次の諸文献に、「龍蹄」の使用例は確認されなかった。

《檢索文献一覽》

①金石文

古京遺文（狩谷掖齋）続古京遺文（山田孝雄・香取秀真）

②木簡・古文書

平城宮木簡一・二、藤原宮木簡、寧楽遺文上・中・下、大日本古文書（編年一〜二五、家わけ十八、東大寺文書）

③ 經疏類

法華義疏（伝聖徳太子筆）・因明論疏明灯抄・唯識論疏肝心記（善珠）・新訳華嚴經音義私記（小川広巳氏蔵）

④ 万葉集（岩波日本古典文学大系）

⑤ 記・紀

古事記（岩波日本思想大系）・日本書紀（岩波日本古典文学大系）

⑥ その他

懷風藻（岩波日本古典文学大系）・風土記漢字索引（植垣節也編）

II、平安時代語文獻

平安時代の言語を反映すると認められる諸文獻を、その表現内容より次の⑦〜⑩のジャンルに分ち、「龍蹄」の用例を求めた。

《檢索文獻一覽》

1、仮名文

⑦ 和歌

古今和歌集・後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集・金葉和歌集・詞花和歌集・千載和歌集（新編国歌大観第一卷）

⑧ 物語・日記・隨筆

竹取物語・伊勢物語・土左日記・平中物語・大和物語・落窪物語・枕草子・源氏物語・和泉式部日記・紫式部日記・

堤中納言物語・夜の寢覚・更級日記・浜松中納言物語・狭衣物語(以上、岩波日本古典文学大系)、新訂かげろふ日記総索引・宇津保物語本文と索引・大鏡の研究・栄花物語本文と索引

2、漢文

㊦公卿日記

貞信公記・九曆・小右記・權記・御堂関白記・左経記・春記・水左記・帥記・後二条師通記・長秋記・永昌記(以上、大日本古記録・史料大成)

㊧古文書・古往来

平安遺文古文書編第一―第十・雲州往来享祿本 研究と総索引・本文研究編・和泉往来(京都大学国語国文資料叢書)・

高山寺本古往来(高山寺資料叢書第二册)・東山往来・菅丞相往来・积氏往来(以上、日本教科書大系往来編)

㊨伝記・往生伝の類

将門記(真福寺本・勉誠社文庫131)・玉造小町壮衰書(山内潤三・木村晟・枋尾武編輯)・日本往生極楽記(応徳

点・天理図書館本)・大日本国法華経験記・拾遺往生伝・後拾遺往生伝(岩波日本思想大系)・浦島子伝・富士山

記・続浦島子伝・新猿楽記・傀儡記・遊女記・狐媚記・暮年記(以上、群書類従第六輯)

㊩法令・史書

日本三代実録・令義解・延喜式(以上、新訂増補国史大系)・類聚三代格(観智院本、吉野政治翻刻)

㊪漢詩文

文華秀麗集・菅家文章・菅家後集(岩波日本古典文学大系)・遍照発揮性靈集・江都督納言願文集(六地藏寺本)・

本朝文粹(久遠寺本)・朝野群載・本朝統文粹(新訂増補国史大系)・高山寺本表白集(高山寺資料叢書第二册)・凌

雲新集・経国集・都氏文集・田氏家集・雜言奉和・粟田左府尚齒会詩・扶桑集・本朝麗藻・江吏部集・侍臣詩合・

殿上詩合・本朝無題詩・法性寺入道殿御集(以上、群書類従第六輯)

以上の、⑦⑧の諸ジャンルの文献群について、どのジャンルに「龍蹄」の使用例が多く認められているかを見るに、⑧の、漢詩文の類に偏っていることが注目される。

⑧昔白^シ一屋幽一閑之夕^へ、只披^{ヒラ}三蠹^ト一簡於拾螢之中^ウ。今朱輪照一耀之朝^ウ、更加龍一蹄於五一馬之外^ク。(久遠寺藏本朝文粹・卷第七、江匡衡・奉行成状)

⑨于時仙一星増飾^{フシカカリ}一綵^ニ(上)一雲^ト為^レ衣装^ニ居務^ニ一悵相^ニ待鶴^ニ一翅之南^ニ一北^ニ。襲^ニ備寛^ニ(平濁)一裳^ニ亦從^ニ龍^ニ一蹄之去留^ニ。

(同右・卷第八、江以言・七夕陪秘書閣同賦織女雲為衣応製)

⑩一尋^ニ旧宅^ニ一策^ニ龍蹄^ニ。出^レ洛行々東也西。窓破竹無^ニ人管領^ニ。台傾松有^ニ鶴双棲^ニ。(本朝無題詩・卷第七、中原広俊・過雍州旧宅)

⑧は、「匡衡昔は茅屋の寂しき夕に書を繕いて苦学に励みしが、今は朱輪の栄ある車(朱輪五馬は地方長官の乗する所故に言ふ)に駕して更に駿馬の賜に預りぬ」という文脈に於いて使用されている。

⑨は「時に織女は飾を増し、色美しき雲を衣とし、霧の帳に装ひ居り、虹の裳を襲ね備へて、鶴の橋を天河に渡すを待ち、牽牛の龍馬に乗じて入り来るに任せぬ」という文脈で用いられている。

⑩は、「策(ブチウツ、観智院本類聚名義抄・僧上68)」対象であるから、△蹄△の意はなく、馬を指すことが知られるのである。

右の三例は、いずれも古辞書等の意味記述にもある△逸馬△の意と解して矛盾しない。中でも、⑧は△献上の品△として「龍蹄」を「加」えるのであって、平家物語に於ける「龍蹄」使用の場面と似通っており、注目されるのであ

る。

但し、一例、喜多院御室守覚法親王(一一二〇二年入滅)の手に成る「釈氏往来」に認められ、

⑩来九日公家御願寺供養。可レ参引頭。内々尋子細。人々尽華美云々独非可レ存儉約。慙以経營。仍騎馬童、

可ニ相具ニ之支度也。龍蹄一兩疋、可ニ借給。年来已有三丁寧之芳志。今度蓋許申請之懇懐。恐々謹言。

サレテヤン

権少僧都

八月 日

謹上 民部卿殿

(第十七条・往)

の如くである。やはり、「一兩疋」「借給」のであるから、平家物語や本朝文粹⑧の例に通ずるものと認められる。

古往来の類は、所謂記録体の文章の性格が強いものの、部分的には漢文調の詩的效果をも狙っていたらしいことが原草志氏の御論に説かれており、銀漢(天)、白波(盗人)といった色葉字類抄登載の所謂別名と称される語彙を撰取していることが明らかにされている。

実際、編者守覚法親王には「表白御草」や「啓白諸句集」といった漢詩文的述作が存するのであって、漢詩文との距離の近さを想定させるものである。

因みに本稿が問題としている「龍蹄」も、

○龍(平)蹄(去)馬名也 (前田本色葉字類抄、前掲)

の如く、色葉字類抄に言う別名に属するものであるが、唐土所撰の類書である、初学記や白氏六帖事類聚には認められないものである。

以上の考察を通して、平家物語に認められる「龍蹄」は、中国文献に於いてもその字面を求め得るが、意味は一致

せずこの語が直接受容された可能性は極めて低いと考えられる。そして、本邦文献の、特に平安時代の漢詩文、もしくはそれに準ずると見られる文献群に用例が集中し、そこに於ける意味・用法と一致を見ることから、これより受容されたと見る方が自然であろうと判せられるのである。

この事實は、又、平家物語の文体を考える上で重要な意味を持つと思われる。

従来、平家物語の文体についての説明は、(一)中国漢文乃至それを本邦に於いて訓読した漢文訓読文、(二)中古の和文、(三)記録語文、四)中世以降の俗語、の四つの要素の混淆という理解の上に立ってなされて来たように思われる。¹⁰⁾ しながら、今迄縷述した如く、〈逸馬〉の意で用いられる、漢語「龍蹄」は、右の文体に属すると見られる文献群のいずれにも通例見出し難いものであって、これら四つとは異なる、別の文献群の系統を引く用語であると考えざるを得ないものである。

その別の文献群とは、従来、概ね正格(純)漢文であると考えられて来た、本邦人作成の漢詩・漢文学を中心とする文献群である。

峰岸明博士は、既に、和漢混淆文に於ける漢語について、それが文体と関わる面のあること、又、これを少なくとも〈仏典系漢語〉・〈漢籍系漢語〉・〈日常漢語〉の三類に区別すべきことなどを説かれ、注目していられる。¹¹⁾ 〈仏典系〉〈漢籍系〉の称は、今回のフローチャートにも採用させて頂いた。

この峰岸博士の分類に従えば、字面・形態としては〈漢籍系〉の文献に求め得るので、一応その辺りに分類されようかとも思う。しかし、その意味・用法が、本邦独特のものであって、しかもそれは平安朝漢詩文の世界で獲得されたものであることを合わせ考えると、新たに一類を設定すべきかも知れない。

ともかく、平安朝漢詩文の用語が、鎌倉時代に入って平家物語の如き和漢混淆文に受容されるという事實は、この種の文章の性格を考えてゆく上で、ひいては平安時代の言語体系を考える上でも、尚追及されるべき重要な課題であ

ると思われるのである。¹²⁾

又、一方、それは、漢詩文の用語の、所謂「日常化」をも意味する。

「龍蹄」が院政最末期から鎌倉時代にかけて成立した往来物の『釈氏往来』に例の見えることもそれを物語っているかのようであり、又、鎌倉幕府の書記などの手に成ったと見られる『吾妻鏡』にも、

⑫亦御一人等。献^{ケシメ}御馬^マ。及^フ二^ニ百^ヒ餘^ヨ一^ヒ疋^{ヒキニ}。以^テ此^レ龍^ノ蹄^ノ等^ヲ。被^レ奉^テ于^ニ鶴^ノ岳^ノ宮^ニ。当^リ一^ノ国^ノ一^ノ宮^ノ。大^ホ庭^ノ序^ヲ。三^ツ浦^ノ十^ノ一^ノ天^ノ。栗^ノ一^ノ浜^ノ大^ノ明^ノ一^ノ神^ノ已^レ下^ノ諸^ノ社^ノ也^{ナリ}。(寛永三年版吾妻鑑卷第二・36才8)

を始めとして、数多くこの語の使用例が確認されるのである。

遠藤好英氏も注目していられるように、保寿院山科道安が、『槐記』に、

○文章モ上代三百年ノ書ハ、令ヤ延喜式ヤ江家次第等、転倒ハ勿論、漢朝ノ文ニ耻ルコトナシ、定家時代ヨリシテ日本流ノ文章ガ一流出来テ、文字ノ転倒等コ、ロヘ難キコトアリ、(五月。享保九年。廿一日)

と述べ、定家時代に記録体の文章が変化することを示唆した文言が想起される。¹³⁾

六、むすび

—— Les faux amis ——

平家物語に使用されている漢語の中、今回は、「龍蹄」という語を取上げ、①唐土の文献に於いてもその語形は認められるが、意味を異にしているという事実、②本邦の文献に於いては、平家物語以前では漢詩文中に偏して使用されるという事実、の二点を明らかにし得たかと思う。用例の乏しいこともあって、聊か結論に不安が残るが、尚調査の不備を補いつつ所論の補正に努めたいと思う。

又、今回は考察が至らなかつたが、「龍蹄」という一漢語を対象とした場合にも、尚今後の課題として次の如きも

のが存しよう。

(一)「龍蹄」という語は、唐土の如何なる文献によって、いつ頃本邦人が知ったのか。

(二)本邦文献の「龍蹄」は、何故、中国文献のそれと意味を異にするに至ったか。

右の二点は、かような中国と日本に於ける漢語受容の問題に留まらず、一般に二言語間の交渉を論ずる場合に、常に問題にされる事柄でもあると思われる。

すなわち、これは Koessle, M. et Derocquigny, J. : Les faux-amis ou les trahisons du vocabulaire, Vuibert, 1928 を初出とする Les faux amis (にせの友達) と説かれるものである。

Les faux amis とは、二言語の間で語源的にも語形的にも一致してはいるが、それぞれの言語・文化の中で別々の発展を遂げたために異なる意味を持つに至った語 (mot) とうしのことと言う。

例えば、フランス語と英語との間に於いて指摘されている、éventuellement (万一の場合) : eventually (結局)、délai (へ事を行なうための) 期日・期限) : delay (遅滞・遅延)、actuel (現代の・現在の) : actual (実際の・本当の) の如きものである。⁽¹⁾

つまり、主として欧語について論ぜられて来た、この Les faux amis の研究は、中国と日本という、二言語間についても適応されてしかるべきであると思うのである。従来、本邦に於ける漢語研究は、かような欧語研究の進展とは別個に進められてきた観があるけれども、対象とする二言語の違いこそあれ、今後、同一の基盤に立つテーマとしてこれを扱うことによって、方法論など学ぶ所が多いことが期待せられるのである。

(1) 山田孝雄『平家物語』序説(岩波文庫)

(2) 「準漢語」の称は、

高松政雄「準漢語の一つの場合―着―について」(『岐阜大教育学部研究報告人文』31、昭58・3)

同「準漢語―字類抄疊字部中の―詞―」注記語より―(『訓点語と訓点資料』69、昭58・8)に見える術語である。

(3) 峰岸明「乗燭に及びて」小考(『佐伯博士古稀記念国語学論集』、昭44・表現社)

同「和漢混淆文の語彙」(『日本の説話?言葉と表現』、昭49・東京美術)

築島裕「和漢混淆文」の項(『国語学大辞典』昭55・東京堂)

櫻井光昭「平家物語」に見る和漢混淆現象」(『国語学叢史の研究5』、昭和59・5、和泉書院)

(4) 小林芳規「鎌倉時代語史料としての草稿本教行信証古点」(『東洋大学大学院紀要』2、昭40・9)

(5) 前田富祺『国語学叢史研究』(昭60、明治書院) 第二部国語学叢史研究I語史研究から語彙史研究へ、第二章語史研究のフ

ローチャート

(6) 柿村重松『本朝文粹註釈』(大11、内外出版) 上二〇四〇頁。

(7) 注(6) 文献下一四五頁。

(8) 原卓志「色葉字類抄に於ける別名の性格―古往来に於ける使用量と使用場面との分析を通して」(『鎌倉時代語研究』8、

昭60・5)

(9) 原卓志「色葉字類抄における類書の受容」(『広島大学文学部紀要』44、昭59・12)

(10) 注(3) 文献。

(11) 峰岸明注(3) 文献「和漢混淆文の語彙」

(12) 山本真吾「平家物語の文体に関する一考察―「上皇御所」の呼称をめぐる」(第56回訓点語学会、於同志社新島会館、

昭62・5、口頭発表)。

(13) 遠藤好英「平安時代の記録体の文章の性格とその変遷―「別」字の用法を通して―」(『佐藤喜代治教授 国語学論集』、昭51・桜楓社)

(14) 今田良信「Les faux amis de structure の意味分析について―仏語の certain/sûr と英語の certain/sure―」(『広島大学文学部紀要』44、84・12)

〔附記〕成稿に際し、小林芳規先生には懇切な御指導を賜わった。ここに記して心から御礼申し上げます。

On the Word “ryōtei” in the *Heike-Monogatari*

Shingo YAMAMOTO

In the *Heike-Monogatari* (平家物語) some of Sino-Japanese words was used in the Japanized meaning, and not in the original meaning in Ancient Chinese.

We may take the word “ryōtei (龍蹄)” as an example. “Ryōtei” in Ancient Chinese originally meant hoofs of a dragon and a kind of melons. In our country this word meant an excellent horse.

Traditionally, it has been understood that the *Heike-Monogatari* was written in the *wabun*-style (a style based mainly upon Japanese), the *kambun-kundoku*-style (a style influenced by Chinese), the *hentai-kambun*-style (a style based mainly upon Japanized Chinese), and the daily colloquial language in the Kamakura period.

However, in this paper I argue that the word “ryōtei” in the *Heike-Monogatari* did not originate in these four styles.

I reach the conclusion that it originated in a different style, ie. that it came originally from the Japanized Chinese poetry and prose.